


(卷子、訥庵は錦絵になって当時もてはやされた)



(大橋訥庵、卷子の墓は東京谷中の天王寺にある)
卷子の墓は右

訥庵夫人、大橋卷子の生涯とその文藻

松 田 光 子

はしがき

大橋卷子の「夢路の日記」は、初めて手にした私を強くその世界へと導いた。次に、卷子が勤皇の志士大橋訥庵を夫として、幕末の動乱時代に生き、いかなる事態に処しても泰然としていたこと、又、卷子の人生が波乱に富んだものであったことを知った時、私は卷子の作品に一層の興味を覚えたのである。

時代背景

一六〇三年、徳川家康が江戸に幕府を開いてより二百年を経た一八〇〇年前後には、さしも整備された封建体制も、社会の発展とともに次第に矛盾をはらんできた。これに対し幕府は再三にわたる改革を行ったが、たいていは失敗に終わった。

自然に成長して止まぬ貨幣経済を合理的に活用せず、かえって不

自然にこれを抑圧しようとし、一方、農民に過重な租税を課し、その生活を圧迫して、彼等を犠牲にしながら、農民生産に立脚する武士の支配権を維持しようとする、大きな矛盾が幕政改革の根本方針の中にあつたからである。又、民間には学問の発達によって、封建社会の矛盾を指摘する動きが現われてきた。しかもその時、外国船が来航して、事態は内外ともに重大化したのである。

嘉永六年、アメリカの東インド艦隊司令官ペリーが、フィルモア大統領の回書をたずさえ、軍艦四隻を率いて浦賀に入港し、武力を誇示しつつ開国を迫った。その強硬な態度に幕府はやむなく回書を受理し、翌年、ペリーが回答を求めて再び来航するや、幕府はついに日米和親条約（神奈川条約）を結んだ。ついでイギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を結び、二百年以上にわたる鎖国政策は、ここに崩れ去つたのである。

安政三年、総領事として下田に着任したハリスは、通商条約の締

結を強く求めた。幕府にはこれを拒絶する力が無く、幾度かにわたる審議の後、安政五年一月、日米修好通商条約を議定し、勅許を得る為老中堀田正睦を上京させたが、失敗に終り、幕府は窮地に陥つた。

これより先、將軍の後継問題が起り、水戸藩主徳川斉昭の子一橋慶喜を立てようとする改革派（尊攘派）と、將軍家定のいとこ慶福を紀州家から迎えようとする現状維持派とが、激しく対立したが、後者の代表である彦根藩主井伊直弼がこの年四月に大老となり、六月、幕政を専断し、勅許を得ずして日米修好通商条約に調印したのである。

井伊直弼のこの違勅調印、そして、將軍維新に關しての独断専行は、革新派をいたく刺激し、尊攘運動は激化した。直弼はこれを弾圧すべく、安政の大獄を起し、徳川斉昭をはじめ多くの有志の公卿藩主が処刑せられ、又、吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎等を筆頭とする多数の尊攘派の人々が投獄処刑された。これによって、直弼に対する反幕派の憤激は極度にまで高まり、翌万延元年、水戸藩の志士たちが直弼を桜田門外にて刺殺するに至つたのである。

直弼の死後、老中安藤対馬守信正が政局を担当した。信正は直弼の遺策である公武合体策を実行に移した。これは皇妹和宮親子内親王を、將軍家茂への御降嫁を奏請せんとするものであった。これが

強行された結果、尊皇論者の憤りをますます高く高めた。

このような情勢に直面して、世を憂えた人々は多かつたが、なかでも宇都宮の志士大橋訥庵こそは、安政の大獄に倒れた人々の遺志遺業を成し遂げんが為、王政復古への道を邁進したその人である。

大橋訥庵と坂下門外の変

大橋訥庵、名は正順、字は周道、通称順蔵、訥庵はその号である。父清水正徳は赤城と号した。清水氏は上野赤城村の人で、長沼流兵学家として世に知られた。訥庵はその第四子として文化十三年江戸飯田町に生れた。性格は深沈にして胆氣あり、頗る読書を好み広く経史子集に渉獵し、詩文に巧みであった。十四才で信州飯山の藩士酒井力蔵を頼つて遊学の途に上り、ついで酒井家に入って元服し、二十一才の時飯山藩士の籍に列した。これより前訥庵二十才の時、壽命により江戸に出て佐藤一斉の門に入った。一斉門下における苦学の様子は、次の一文からもうかがうことができる。

「時ニ君尚窮乏ニシテ燈油ヲ購フノ資ニ乏シク同志ノ友ヨリ蛤貝一杯ツ、油ヲ請ヒ受ケテ僅カニ夜学ヲ為シ書籍ハ師家其他友人ヨリ借覽シテ之ヲ弁ス然レモ性精敏強記一読ノ后ハ牢記シテ忘ル、事無ク昼夜講学倦ムヲ知ラス数年ノ后ニハ学業駁々トシテ進ミ先輩ヲ凌駕シテ優ニ其右ニ出テ一斉門下ノ俊秀ヲ以テ称セラルルニ至ル」

(下野烈士伝)

訥庵二十六才の時、師の一斉を通じて、江戸日本橋の豪商佐野屋大橋淡雅に請われ、大橋家を継ぐこととなった。そして、淡雅の娘卷子を妻としたのである。

元浜町佐野屋の店近く橋町に思誠塾を開き、一家を構えて独立した。塾には多数の子弟を教養し、又、養父淡雅の勧めもあって、幕府の閑老たる宇都宮藩侯戸田忠温に招かれ、江戸の藩邸にて書を講じた。後戸田家の士籍に列し、七人扶持を給せらるることとなった。このように宇都宮藩臣をはじめ、下野はもとより遠い地方からもその名を聞き伝え来る門人は多かつた。この頃の訥庵の門人で、後年国事に奔走する人々は優に二十人を数えることができる。

尚、訥庵の思想は、その著「關邪小言」、及びその書翰等に詳かに見えている。

文久年間は大勢一変の機は、前にも述べた万延元年桜田門外における井伊大老刺殺が、少なくともその誘因となったが、更にその一変の裏行を促進したのが、この文久二年正月十五日坂下門外における安藤対馬守信正要撃の一件であつた。これは刺殺の目的こそ違し得なかつたが、安藤信正をして政治の要職より去らしめ、ついには、幕政変革の端を発したのである。

さてこの安藤信正要撃挙行の中心人物として、大橋訥庵が第一等にあげられる。訥庵はいたずらに国を憂えていたのみでなく、又、自らもそれに満足せず、たび／＼時務を建白し、上書した。文久元年九月、門人椋木八太郎（宇都宮の志士岡田真吾の妻の兄で、石州津和野藩士）をして、朝権復古の秘策を持し、宇都宮藩主戸田家の宗家たる正親町三条実愛に就いて、之を上奏せしめた。この秘策はたしかに天覧に供せられたとの知らせがあり、椋木の周旋の功を奏したことが判明した。しかしながら、秘策は不幸にして採用せられるまでには至らなかつた。

然るに一方においては、訥庵は椋木を上京せしめるとともに、宇都宮の人児島強介を水戸に遣わし、相共に攘夷を実行し、和宮の御東下を留め奉らんことを提議せしめたが、水戸藩では奸臣安藤信正を除くことを望んでいた為、訥庵の策には容易に応ぜず、かえつて訥庵の助けを得て、自分達の志を遂げんことを児島に説いた。児島はその論に耳を傾け、再来を約して宇都宮に帰り、訥庵の義弟一妻卷子の弟一宇都宮の富家菊池教中に復命した。教中は直ちに使を馳せて、訥庵にこれを報告したが、訥庵は時期尚早としてこれを退けた。

同時に、訥庵の門人多賀谷勇、武蔵の郷土尾高長七等は、日光宮（上野の輪王寺宮門跡）を擁して、日光或は筑波に義兵を挙げんと

企て、教中の添書を持って訪れ援助を請うたが、訥庵はこれにも時期尚早として同意しなかった。

然るに、水戸の平山兵介等は、いよく安藤信正を要撃せんとしばく来りて談合したから、訥庵もその志をこのまま葬つてしまふべきではないと考え、彼等に要撃の計略を授け、斬奸越意書を書き綴り、別にも盟規約書も作り与えることとなつた。訥庵は京都への上書に多くの希望を託していたが、しかし、その方も彼の思うようにはならず、かえつて彼自身の身の上にさえ、危険の迫る状態となつた。故に、訥庵は今をむしろ、安藤信正要撃に同意する心境に至つたのであらう。

以上のように、訥庵は安藤信正要撃の一件については、高早論を唱えていたが、ついに、訥庵、教中を中心とする宇都宮側と水戸側との協同事業として、いよく実行することとなつた。そして水戸側の希望通り、翌年文久二年正月十五日を期して、坂下門外にて安藤對馬守信正を要撃することに決した。

文久二年正月六日、訣別の宴を張つた。又、坂下門外の見取岡もそれよく出来上り、今や其機を待つばかりとなつた。

然るに、このように苦心して計画してきたにもかかわらず、意外の事件が斬奸挙行を目前にして突発した。即ち、これらに先立つて宇都宮藩士岡田真吾、松本銀太郎等が、一橋刑部卿慶喜を下野に迎

え大将に仰ぎ、有志を糾合して旗を挙げんと企てをなし、一通の上書をしたため来たつたので、訥庵はそれに加筆し、旧知の一橋家の近習山木繁三郎に示して慶喜の内覧を求めた。ところが、この山木の自訴によつて、事は幕府の知るところとなつてしまつた。幕府ではかねてから、訥庵の宅が志士浪士の本拠ともいふべき模様を見て、その挙動に注意していた矢先であつたから、正月十二日彼及び其養嗣子正齋を捕え、家宅を捜査し土蔵に封印した。訥庵の妻巻子は、妻として、母として、夫や子が目の当りに捕えられていく悲嘆の心を切々と詠じたが、それらの多くを「夢路の日記」に見ることが出来る。

志士の人たちは、十二日に訥庵が捕縛せられたからには、空しく時日を経過する訳には参らずと、最初の予定通り正月十五日、安藤對馬守の登城を待ち構えて、坂下門外に襲つたのである。

ここにおいて注目すべきは、この変が単に一介の浪士によつて挙行されたのではなく、訥庵をはじめ、教中、児島強介、河野頭三等は草莽の臣であり、学問で結ばれていた文人グループのメンバーであつたことだ。加うるに、地元の豪農豪商の層がこの背後にあつたということは、この事件が単なる幕政改造に留まらず、倒幕運動の先驅として、画期的なものであつたことを示している。されば、事は志士達の意中を果さなかつたにかかわらず、その効は志士達自身

の意思を超えて、大であったと言うことができる。

卷子の生涯

大橋訥庵夫人、卷子は文政七年、呉服商佐野屋大橋淡雅の次女として生れた。

淡雅は、医者大橋英斉の次男であった。英斉の妹伊与は、宇都宮の商人佐野屋治兵衛菊池盛徳に嫁していたが、その子介介孝古には男子がなかつた。そこで英斉は、淡雅に菊池家を継がせる意圖をもつて、幼時より孝古のもとへやつた。淡雅二十五才の時、孝古は娘民子を淡雅にめあわせると同時に死去したので、「佐野屋長四郎」を襲名した。淡雅は一代のうちに、幾度かの火災その他の災厄に会いながらも、江戸元浜町の店を本店に、栃木、茨城、群馬、福島、千葉の各県にわたつて、五十軒にも及ぶ分店、支店を持つ、江戸屈指の豪商にまでなつた人物である。それ故、幼きより学問をよくし、商の傍に「淡雅雜著」（「富貴自在」「淡雅行夷」「保福秘訣」より成る）を著わしており、その交わるところ佐藤一斉、山口菅山、渡辺華山、立原杏所、巻菱湖等の当代一流の文人達であった。一方、その配民子は商人の子ではあるが、教養高い女性であった。早くより吉田敏成や大國隆正に就いて国学・和歌を学び、特に、和歌に堪能であり、女流歌人としても聞えた。安政五年には、

歌集「倭文會集」三冊を版行している。

この淡雅・民子の次女として生れた卷子は、両親より血と教養を受け、町家の子女としての教育はもとより、歌の嗜みも深く、幼きより母に就いて学び、その歌会などには常に出席して見事な歌を詠じた。後には、敏成及び隆正に師事して国学も修め、以て、品性の陶冶に努めた。又、書道をよくし、茶儀香道などにも通じて、才媛の誉高く、卷子妙令の十八才なる時、訥庵を夫として迎え、大橋家を継いだ。

菊池家は、卷子の弟教中が継いだ。教中は幼きより神童の噂高く、詠書にも明敏、特に書画の巧みさは天成と言つてよい。このことは、彼が佐野屋を継ぐ二十六才頃までに書かれた、「澹如詩稿」が如実に物語つてくれる。この教中は、後に義兄訥庵と志を同じうして、国事に奔走することになるが、彼は又、これらの活動に対し、真岡の渋川屋などと共に、金銭面において大きな力となつたのである。

さて、訥庵卷子の結婚後間もなく、桶町に思誠塾を開いたので、訥庵夫人としての熟一切のきりもりが、若き卷子の手腕にまつことになつた。翌天保十四年には長女の誠子が生れた。弘化四年に長男慎一郎が、嘉永元年に次男文治が生れたが、二人の男の子は嘉永元年十一月に二才で、三年五月に三才で共に夭折したので、大橋家は

深い悲しみに包まれた。その後女の子が生れたが、いづれも夭折した。しかし、子供六人中残ったのは、長女の誠子と末男の義三であった。この点においては、甚だ恵まれない家庭であった。故に、嘉永六年、訥庵の師佐藤一斉の孫正澄を、誠子の婿になるべき含みを以って、大橋家の養子に迎えた。

訥庵の名が世に知られ、門下生の増えるにつれて、塾生の世話をはじめ、塾のいわゆる奥向きの一切の切回しは大へんなものであった。又、世間が騒然となつて、訥庵が尊攘論の実験運動に乗り出すにあたっては、後顧の憂い無きようにとの、巻子の内助の功は一通りではなく、夫の良き理解者として、夫の為すことを心静かに見守つたのである。

文久二年正月、まだ屏蘇気分も覚めやらぬ十二日(坂下門外の変に先立つこと三日)、突如として夫訥庵は捕えられた。翌十三日に、塾は嚴重な家宅捜査を受け、家財一切を土蔵に入れて封印が施された。訥庵につづいて、誠子の夫正澄も藩邸に禁錮せられるところとなり、又、塾生も散じてしまつては、為すすべもなかつた。しかしながら、まだ幼き義三のむずかるのを慰めつつも、立派に留守を守り通したのは、やはり、訥庵夫人巻子ならでのことである。この一年間、即ち事件発生より到着までの詳しい事は、宇都宮市寺町の菊池小次郎氏所蔵による、巻子自筆の、主に母氏子に宛てた約百通

の書翰から、うかがい知ることができる。又、巻子のその頃の感慨を記したものとて、「夢路の日記」がある。これは、巻子の名を一世に高からしめたもので、当時広く志士の間に愛誦せられ、後しばしば版を重ねた。

かような不自由で苦しい生活も、同じ年の七月七日には、訥庵が獄を出て宇都宮藩邸に入ることとなり、事態は一変して、夢かと思うほどの喜びにわいた。しかし、それも東の間で五日の後には、最も深い悲しみと化したのである。それは、訥庵の死であつた。悲しみはこれだけに留まらず、つづいて、一ヶ月後の八月八日には、弟教中までが三十五才の若さで、訥庵の後を追うようにして亡くなつた。時を同じくして、一家の柱とも仰ぐべき人物を、二人まで失つた遺族の悲嘆は言うまでもない。それらは、巻子の「夢路の日記」、和歌、更に書翰を通じて、人々の胸にひしくと迫ってくるものがある。

訥庵没後、思誠塾は正澄(陶庵と号した)が受け継ぎ、巻子は相変らず、塾生などの世話をしつつ、義三を相手に「大橋のお巻さん」と親しまれながら、余生を静かに送つた。そして、健かに明治十四年迄存えた。行年五十八才。

訥庵及び巻子の墓は、東京谷中の天王寺にある。(写真参照)

巻子の文藻

大橋巻子が才媛の誉高き女性であることは、周知の如くであるが、次に、巻子の名を一世に高からしめた、「夢路の日記」、及び和歌、書翰をみていきたい。

「夢路の日記」は一篇の歌物語である。坂下門外の事件にて、夫納庵、養嗣子正齋、弟教中が、次々と捕縛せられた発端より筆を起し、半年の後、即ち七月十二日における納庵の突然なる病死、八月八日の教中の病死、そして、八月二十八日正齋が許されて帰宅し、事件落着に至るまでの巻子の心情を、歌に織り込んで記したものである。これは、折々にしたためた歌四十首を、巻子が後になって綴り合せたのであって、当時の勳皇の志士の妻として、母として、姉としての決意に満ちたものである。

この「夢路の日記」が、当時志士の間で広く愛誦せられたことは、早くも文久二年冬、小山朝弘の「進取余論」に、その歌が掲げられたことによっても知られる。又、かの伴林光平も自らこれを写している。かように多くの人の手によって写しとられ、各地に流布されたが、その為、伝写の誤りも少なくない。ここでは、寺田剛先生編の「大橋巻子家集」を参考とした。

「我せをはしめて早うやしなひたてし子どもまでおほやけのひと

やにとらはれ侍りつるは今年文久二とせといふむつき十二日の夜に
なん有ける」、かねてより覚悟していたとは言え、頼みとする人二人までが難に会っては、さすがの巻子も、「いとあさましようてなみたもえ出ず」という状態であった。「されとおもひ直して」詠んだ歌、
中空の霞にしはしくもるとも

春のひかりのてらてやまめや

すへらきの御くにをおもふま心に

天のめくみのなからましやは

は、ひたすらに夫を、子を信じ、国を思う気持が強く出ている。

「かゝるひゝきのけしう江戸のくま／＼まで聞えみちためれはおほやけをはゝかりてつねにしたしうとふらひまうてこし人たにたえて音つれもなし」

あさましさいふ斗りなし人心

かゝる折こそ奥もしらるれ

何という世間の風の冷たさであるう。「かゝる折も霧のみ朝夕たえず庭に音つれ」て、人の心の変りやすいのにひきかえ、自然は心を慰めてくれる。

よの人は音つれたえしわか宿を

とふもうれしき春のうくひす

この歌などは、志士の家庭を詠んだものとして、まさしく勳皇裏面

史の一頁とも言うべき歌境である。

「かくてきさらき廿日あまりの日我をとうと教中の古郷にありしかおなしたかひにあひてこれさへからめられ」た。ここに、残された家族の悲しみは一段と深まったのである。「今は花のさかりをもよそに聞なしてひたやこもりにて暮しけるほどに卯月の頃にもな」った。とかくするうちに、冷たい風評ばかりではなく、この度の幕府の処置の不当をなじる声も、世間には聞かれるようになってきた。

さかしらの風は吹くともくれ竹の

すくなるふしのいかてをるへき

八百よろつ神もあはれとうけ玉へ

我みにかへていの心を

と、悲嘆のうちにも世の声を耳にし、わが夫、わが子、わが弟を信賴し続けてきた心が、一層力づけられていく卷子の様子が伝わってくる。

「とかく空のかきくもりて雨の音のみ軒にたえず」する、憂鬱な五月雨の空もようやく晴れ、またたく間に、吹く風も夏来れりの感を呈する頃となった。宇都宮藩をはじめ、同志の人々の奔走が効を奏して、

ありとたにしられぬ草の下露を

おもひもかけすてらす月影

「おもうたまへかけす我世の君ひとりにはかにこのぬは玉のやみのせかいを出され」ることとなったのは七月七日のこと。しかし、「いとうれしとおもうたまへしはゆめはかりのまにて重きいたつきにふし玉ひて」

雲もる月のひかりのてらさすは

むなくきえんむくらふの露

予期せぬ訃庵の死が待っていた。夢ではないかと疑うほどの喜びも、僅か五日間で終るといふ現実の厳しさに、またもや直面せねばならなかったのである。

むさしの、露ときえ行人よりも

おくる、そでのやるかたそなき

きえ行もとまるもおなしむさしの、

露分け衣ほすよしそなき

いかばかりの悲しみであったことだろう。あまりのことに一時は、

御国おもふ人の心をいかなれば

しらすかほなるやほよろつ神

神をさえうらめしく思ったこともあったが、七月二十五日、弟教中がかるうじて出獄となり、「少しはなげきもとりかへされてなくさ」みとなった。「此ひとりをたにたのもしきものにして我子ともものゆ

く末もたのみ聞えはやおもひつゝくるにいかなるまかつひのたゝりにか葉月七日といふに又にはかにやみのゝしりて八日といふ曙に此人さへそはかなくなり侍ぬるはゆめに夢みしこゝちして」

夢ならばとくさめよかしこのうさを

のちのうつゝのかことにはせん

せきあへぬなみたはまたしむねにのみ

みちては袖のぬれんともせず

しらすりきともにかたらんうき事も

我みひとつにつもるものとは

教中の死におけるこの嘆き、運命の悪戯とは言えこれ程のものがどこにあろうか。一ヶ月の間に家の中心人物を二人とも失い、残された遺族の悲しみは尽きるどころがない。しかし、巻子は理性を失わずに、思い直して、

君か為よのためおもふものゝふの

清きこゝろは神そしるらん

時には、氣丈夫な巻子とは言え、

駒なへて帰る日いつともすれは

なきもわすれてまつのはかなき

ということもあつた。が、「誠に此のふたりかくいたつらになり行しそのもとはたゞ国のみためをひたすらにおもひあまれる心よりさ

るいみしき事のさまにもなりにてはへれは色をもかをもしる人にまかせて」

もゝとせの後もくちめやかかくわしき

名はたち花のたちかれぬとも

うき事は夢となしてもとゞめ置

名は幾とせもさめすにあらなむ

巻子はたゞ悲嘆のみには釋れていなかった。いつしか死せる人への信頼より、正しい明るさを見出したのであろうか、

あまかけるたまの行へは九重の

御階のもとを尙やまもらん

と、大丈夫の心がうかがえる歌を詠むようになっていった。そして、「つき月日を過しつるまゝに閏八月の廿日あまり七日」という日、最後の頼みとすべき正澄が許されて帰ってきた。二人までを空しくしたとは言え、せめてもの慰みであった。

たのみこし二木の松のかれしより

その若はえの末そまたるゝ

しかして、事多かつたこの月日を回顧した時、

おきて又たれかしのはんなかれての

よにもたえせぬこの水くき

なかれての世にもつたへんものゝふの

にこらぬ心水くきのあと

なる歌が出てきたのである。

以上は、名高き「夢路の日記」一巻である。それは次々に夫、子、弟の殉難に遭逢した折の、巻子の心情のほとばしりと言え、その格調高い文章と、声調の韻きの美しさは、巻子の教養の高さを示して充分であり、これらが読む者の心をとらえるのである。

「夢路の日記」の他、巻子は多くの和歌を詠んでいる。彼女の歌は、当時江戸時代末期の一般的影響もあつて、題詠というものも多いが、国学的風趣ある作も少くない。その点特色あるものである。尚、巻子の短冊は、現在も菊池小次郎氏が多く所蔵されている。

かしこしな雲居をよそに立出て

きそのあら山こえまさむとは

数ならぬたひしかはらの身にも猶

あめのなげきと聞けば悲しも

かしこくもけふ九重のみかと出を

なげかさらめやよもの民草

文久元年秋深く、和宮御降嫁の時である。これらは勅皇の事に関する歌で、巻子の態度が知れよう。当時、幕府の強引なる公武合体策に憤る志士が多く、右の感慨は、ひとり巻子のみのもではなかつたろうが、かように詠んだ歌は勅皇歌でも他に例がなく、もし

て、和宮様の御境遇に對し、女性として同情申し上げている点に注目すべきである。

国のため生野の道にますら雄か

露ときえぬと聞くはまことか

作者自身の勅皇の事蹟に就いて詠んだものは多々あろうが、この歌は、同志を詠んだものである。ここに女性の立場からの、勅皇家としての同志願の片鱗をうかがうことができる。又、勅皇精神の面を題材としているところにも注意すべきであらう。

あはれさよ手なれのこまの身をやきて

君かいのちにかへぬとおもへは

これは日頃飼ひ馴らしていた馬が、火事にあつて焼死んだ時に詠んだものであるが、「君かいのちにかへぬ」、これこそ、巻子の真実の心の姿ではなかつただらうか。

次に書翰であるが、巻子自筆の書翰は現在も菊池小次郎氏が約百通所蔵されている。そのほとんどが、実家の母菊池氏子に宛てたもので、事件の文久二年一年間に限られている。これとさきの「夢路の日記」とをみていくことにより、この一年間が大橋巻子にとつて、いかなる年であつたかが浮かび上つてくるのである。

坂下門外の変に先立つ一月十二日、納庵は揚屋入りとなり、正藏は宇都宮藩邸にお預けとなつたが、その記憶も新たな二月二十二

日、今度は教中の捕えられるところとなつたのである。

此度浦安^(取)入牢の事は別たん事六ヶ敷相成候事にもこれある間敷全く極内々のおしらべに御坐候間屋敷へ差置候べく何事もおしらべずじもれ安く候半と申所にて揚や入りと相成候半事と案し申候意はもはやおしらべの事もこれなく候間屋敷へさけ候て入代り候事と存参らせ候委細は常七より御聞可被下候常七へもかたく口留いたし置候得共尚又御前様よりもよく御申付あまり人などに内々の事話不申候様御いましめ置可被下候扱又浦安入牢致候に付伝兵衛安兵衛の輩ウロクへおそれ候ては家のしまりがぬけ大要に御坐候間能々心持をチャント引しめ家政の乱れぬやう精々御前様より御命し可被下候後々出牢致候ても其時までには店がみだれ居候ては何にも相成不申候間よく伝兵衛などへ御さとし可被下候伝兵衛などは思ひの外腹せまく只々おそれ居候むだな心配斗り致しとんとさしあたりたる所は考も何分出来不申よればさわれば末々のなり行の所など斗り心配いたしよほどあわて居候けしきに御坐候間よく心を引しめ候様くれ御さとし下され度願上参らせ候番丁三人は誠に／＼行ととき少しのひまもなくほんそういたしそれ／＼三人の命にかへてもすくい不申候ては相成不申こつにくの故のみならず天下の為に大事のはしらにておしめ候事故それ／＼が身命はおしむにたらずと申候てふんこつ致居候事実に／＼

かんじ入り泪もこぼれ参らせ候

これは二月二十五日の手紙である。即ち菊池大橋両家の中心たる人が、三人共捕えられてしまった時ののである。さりながら、女性とは思われぬこの文面の力強さ。大の男でさえもうろたえているのに、無駄な心配ばかりせず心を引き締めて、家政を乱さぬようにとの細かい心遣い。この両者を備えていたからこそ、女ながらも世間の冷たい目を受けながらに、留守宅が守り切れたのであらう。ここに、巻子の真の姿を見る思いがする。

今日伝兵衛出立と申候間鳥渡一筆申上参らせ候過る四日御文の御返事は十一日出に申上候間今使は不申上候扱願病^(病)死の事は店よりひきやくをもつて申上候由致委細の所は文略仕候正月以来の心痛苦心一日半時も安心のひまなく心をつくし候かひもなく落著にもおよはずして右様相成候事残念なる事は筆紙にもつくしかたく存候事とも又々おもひかへし候得は強介の如きやからもあり先年京師一条の時めしとられ候人々の如きとくらへ候得は先々一日なり二日なり屋しきに出居やらかんびやうもいたし落著はきずつけず宅へかへされ候やら大原殿の思石の趣何やかやと元吉様より委細に当人も承り殊にとふより願居候大越前隠居一ツ橋公御両君とも勅命にて御出かけに相成漸く我らの心願もとゞき天下も一度は一変いたすべくと悦ひ候て少しは心をも安め候上の事に候間せめて

もの事と存参らせ候十二日の明を前夜よりしきりにまち明はつれは起なをりて冷水を一杯かたむけて引とるべしと前夜よりかくごいたし居候間明候てもあけぬふりにいたし置候所誠にねむるが如くくるしみとて少しもなく誠にくほんのじくすいたし候通りに御坐候かねくかゝる時の工風は第一なりと其工風を論じ居候間常々の心願通り門人どもつきそへ居候ても少しもみぐるしく心みだれ候やうすもみせず一言として後世にのこらぬ言葉なしと門人ども申合居申候なきがらはやはりぼだい所天王寺へかりに葬り候やう奉行よりさしづありて妻子にも参りて名残をしてみてくるしからずと申事に相成候間十分に葬りの手あても東海院様にしたし只々宅より表向出されぬと申事だけかかけめにて其よりは不残手あつにいたし戸田公も一度門人にならせられたりとて御名代一人み送りに御出し被下其よは門人ども昌蔵が譚の代りに送り今朝も宅へ帰り候て御膳なども譚名代として昌蔵つとめくれ申候いづれ落著の上は天下はれて表向の葬式賑々しいたし可申心得に御坐候

○浦事誠にく力を落し何かと申越し候て尚又力をつけくれ私と譚阿名に手紙遣しくれ候得とも切々始め終り兩人ともよみかね其まゝ仕舞置申候此上は一日も早く落著にて浦にめて度逢候て萬事相談いたすべくとそれのみ相楽しみ居申候

卷子は自分の悲しみはさておき、夫の大往生を詳しく記している。

勅使大原重徳が幕府を動かして、七月一日、一橋慶喜が將軍後見職として責任の地位に立つこととなった。納庵はじめ坂下事変に関連した志士、その他の天下の有志の仰望した、一橋刑部卿が政治の局に当ることになったのであるから、納庵も新政の端緒を得たと安心して往生したのである。卷子もこの夫の喜びがせてもの慰めであった。さりながら、取残されたる身の悲嘆は言うまでもない。この書翰、納庵往生より三日を経た七月十五日のである。

御めで度一筆御風聴申上候いよく御機嫌よう入らせられ候御事御めで度存上参らせ候次に爰許皆息災にて昨廿七日譚二事無滞帰宅いたし候間御悦び下され度候漸く大荷をおろし安心いたし参らせ候過る廿五日黒川役雇しきへ例の如くよび出され候所其朝にわかにかに黒役替の御用めしありて登城と承りさすれば奉行替り候ては又ながれに相成あとのしらすはじめ候まで四五十日は休故いつ落に相成候事やと終日茶やにひかへ居心配いたし候所漸く夕刻に相成黒退出後役替に付明後廿七日此の御奉行所へ出候様と御たつしこれあり漸く安心いたし昨廿七日則此の方へ出小笠原長門守殿被仰渡候黒は此度の事に付大金をつひやしほね折ぞんにて落著の書付前日に御下げてありて翌日役替落申わたし候は人にとられ間のわるき事廿五日は取次に出たるものもよりきどもよほど調子お

かしくとて御留守居多前さま笑ひ参らせ候黒はお小姓番組がしらと申て表向は能きやうなる場所にてことごとく身上をふるつて遣はたさねばならぬよほどくるしき役まはりのよし春中より久安に付たる役人は皆追々に底をはゝく役へ出されて大ていからになりたる時分に又下へつきおとされ候間黒も多分其伝ならんと皆申悦ひ居参らせ候申わたされの趣は

森巻両人

右の者一通り吟味いたし候得共何もかゝり合これなきに付両人ともかまひなし

(敷中)
介之助

存命に御坐候はゞ主人よりいとま申付さむらひ奉行御かまひ

順をはじめ皆本口上前に落命いたし候者の名を一人くづゝよび候て此者皆病死いたし候間左様心得ると届しきくゝの留守居へ申わたし候のみに御坐候岡真は死罪申つくべきの所当春の御大礼に付中追はうの上主人へ預け国もとに於てちつ居申付候

松本はいんとう申つくべきの所当春の御大礼によつてけいついほうの上主人預け国もとに於てちつ居申付候

右の通りに御坐候はじめ重くくゝ申出したる所が則黒の付たる落著てかゝるく直したる所が上よりのさげふだに御坐候其外の者どももの事も委しく申上度候得ども今日は追々昨日の事承りて来る門

人もあり屋しきより悦びにくるもあり又封印を切りにかちめつけ同心なども只今四つ半に参りごたつき居候間又の御たよりに委しく申上候其御地十七日(は過る廿五日に届く)十九日(は昨夜とどく)兩度の御文も相とどき難有拜見申上参らせ候勇蔵ももはやよろしきよし大安心に御坐候しかし昨日とどき候御文には少し水気御坐候よし当年ははしか後かつけに相成候者あまた御坐候よしに候間よくくゝ御手あて可被遊候磯太郎も少しあしむくみ着坐にもなん義なりと申候昨日は御めつけの参り候刻げんおそく漸く夕刻あつけに奉行所へ参り候間おそくなり御やしきへ五つ頃帰りそれよりいろくゝ手間とれ漸く四つ過に帰宅番丁よりも参り待居候間それより八つ過頃まで話し居皆留りに相成参らせ候

八月二十八日、母民子に宛てた書翰である。文久二年八月二十七日、ようやく事件は落着の運びとなった。この間多くのがあった。喜び、嘆き、悲しんだ月日も束の間に過ぎ去った。そして、この事件を契機として、翌文久三年より時代は激しく変動し始めたのである。

以上、大橋巻子の主なる作品をみてきた。当時はもちろん大橋訥庵夫人としての、世評のバックがあつたことは否定できないが、「夢路の日記」などは、幕末の女性の作品として秀れたものであり、又、巻子の作品中においても最高峰のものと言えよう。巻子の

作品は、むしろ珍らしいと共に、女流勳皇家の作品の一特異性というべきである。そして、美しい詞の下に、雄々しき血があり涙がある。

結 び

巻子の「夢路の日記」は当時、多くの人々、とりわけ志士の間で親しまれ、読まれたが、巻子と同じ女流勳皇家たる、九州福岡の野村望東もその一人である。彼女の場合、深く愛誦し、それに感じて歌を詠んでいる。

たまといふ玉は酔けて光なき

さざれかはらの輝くはなど

この望東尼の勳皇家としての事蹟は、巻子の場合とは異なっている。即ち、巻子は夫訥庵が国事に奔走したが、その妻として、良き理解者として、又内助者としての立場で援助した。翻って望東尼は、出処進退が全く男性的、積極的で、直接事に携わり、捕えられては獄につながれたりもした。而して、巻子の作品が、この望東尼をはじめ、多くの志士を感激せしめたのは、やはりそれが、国を愛い、世を憐れた真情からほとばしり出たものであるからだろう。かような作品が生れる背景には、菊池家という環境があったこと、夫訥庵の影響があったことはもちろんであるが、その上に、巻子自身

が自分をしっかりとらえていたからでもある。

この巻子、文久二年正月までは、才色兼備の志士の妻であり、母であり、家庭の主婦であった。文久二年正月以後、訥庵、正齋が捕縛せられてからというもの、入牢中の夫や子の留守宅を守る苦衷は、想像を越えるものであつたらうと思われるが、巻子はそれを胸のうちに秘め、心丈夫な婦人として家を守つたのである。そして事が落着いてからは、国を思いつつ子供を育て、大橋のお巻おばあさん”と親しまれつつ余生を送つた。

動乱の激しき時代に生きた日本女性の態度として、誠に学ぶべきところ大である。

(昭和四三・一一・二〇)